

本の選択に関する承認欲求がもたらす影響に関する一考察

中野颯太, Sota Nakano

要約：承認欲求が本の選択に与える影響について考察した。他人前で読書する機会のある人の4割以上がその姿を見られたいと考え、その度合いが強いほど、自発的な行動が多く見られた。また、周囲からどう思われたいかのイメージが異なると、欲求を構成する感情の度合いが異なる傾向が見られた。そして、他人に見られる場合、選書する際の判断基準は変化するか調べた結果、8割以上が変化すると答え、承認欲求が本の選択に影響を与えていることが確認された。また、変化が見られた主な基準は、見せる対象がその本に対してどれほど認知しているかであった。読む当人と見かける他人との間で本への印象にずれがあった場合、期待していた結果が得られない可能性がある。そのため、印象の操作に有効な要素を考慮する傾向があることがわかった。

キーワード：読書、承認欲求、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求、認知度

I. はじめに

日常生活の中で、我々は様々な本に触れている。講義で使う参考書やコンビニの陳列された雑誌など、表現形態や読者がその本に求める機能は極めて多様である。その多様性に伴って、我々は本の内容から読む場所を考慮することが少なくない。2019年、株式会社丸善ジュンク堂書店は、購入した方を対象にその本をどこで読むかを調査した¹。その結果、電車などの乗り物の中と答えた方が6割程度、カフェなどの飲食店と答えた方が4割程度いた。彼らはなぜ、自宅ではなく、周囲の目がある自宅外で読んでいるのか。その選択に承認欲求は影響しているのではないか。仮に承認欲求の影響を受けているとして、その承認欲求が本の選び方にどのような影響を与えているか調べるのが本稿の調査の目的である。また、承認欲求を満たすために読書をしている人は、本の魅力がわからないのではないかと考えた。なので、読書本来の意義を正すことが本稿の調査意義である。

II. 先行研究について

これまでの研究では、本を媒介とした承認欲求を研究したものが多くない。そのため、媒介は問わず、承認欲求の特徴（欲求の種類やそれに伴う行動パターンなど）を研究したものを参考にした。

菅原（1986）²は集団への帰属感を求める欲求として、賞賛されたい欲求（賞賛獲得欲求）と拒否されたくない欲求（拒否回避欲求）それぞれの特徴を研究している。その結果として、賞賛されたい欲求が強い人ほど、積極的に他者からの注目を集める行動を起こすことによって自身の居場所や役割を確保しようとする。一方で、拒否されたくない欲求が強い人ほど周囲との軋轢をなくすために自身の個性を殺す傾向があると考察している（p.139）

小島・太田・菅原（2003）³は拒否回避欲求・賞賛獲得欲求の測定尺度を作成するため、その構成要素を調査したものである。事前に抽出された 20 個の感情項目を用いて、場面想定とともに 5 件法でそれぞれ感情の尺度に関するデータが収集され、それぞれの欲求の構成要素が分析された（p.93）。その結果、肯定的なフィードバックを想定した賞賛獲得欲求では、その欲求の度合いと満足度の度合いが正の相関を示し、一方、否定的なフィードバックを想定した拒否回避欲求では、その欲求の度合いと恥・照れ・怒りの度合いが正の相関を示した（p.94-95）。

以上の先行研究では、2つの欲求（賞賛獲得欲求と拒否回避欲求）が引き起こす行動の特徴や、それぞれを構成する感情が示されていた。しかし、どちらも研究に用いる媒体は本ではない。そこで、本稿では本を媒介とした場合、承認欲求が読者の行動にもたらす影響を研究することにした。

III. 調査の設計

1. 調査方法の概要

本調査の内容は回答者の主観的認知（気持ち）にかかわるので、結果の一般化は難しい。したがって、仮説検証を行わず、実態調査として位置づけする。調査は、Google Form を用いて作成した質問表を SNS に URL 添付し、調査期間は 2023 年 12 月 14～21 日の一週間である。352 名の回答（内訳は、10 代が 82 名、20 代が 164 名、30 代が 70 名、40 代が 31 名、50 代が 5 名）が得られ、その結果を次のとおりに分析する。

2. 調査で用いる質問項目の設計

本調査の目的は、読書する人が周りにどのように見られたいか（カッコいい・ダサイという2つの承認欲求のタイプ）、それによる本の選択への影響を明らかにすることである。それに基づいて、質問項目を設定した。調査の対象者は、他人の前（職場、学校やカフェなど）で読書をする機会がある方である。そして、一連の質問項目に回答する際、ある一冊の本を回答者に自由に想定してもらおう。また、調査項目を設定する際に同条件の大学生10人に事前調査を行い、項目の抽出を行なった。ただし、本調査は彼ら10人の回答データを含まないものとする。

以下は各チャプターの調査対象を示したものである。

〈1〉では、他人前で本を読む機会がある人を対象に、承認欲求の有無を調べる。

〈2〉では、〈1〉で承認欲求があると回答したグループの承認欲求の度合いと、彼らが周囲からどのように見られたいと考えているのかについて調べる。

〈3〉では、承認欲求を構成する感情について調べる。事前に他人前で本を読む機会のある大学生10人に承認欲求を構成する感情を複数個挙げてもらった。その中で全員が共通して挙げていた「誇らしさ」と、先行研究で賞賛獲得欲求と正の相関が見られた「満足感」を質問項目として抽出した。本稿では、読書している姿を見せることにおける承認欲求の度合いと、以上の2つの感情がどのように関係しているのか調査する。

ここで辞書を用いて、それぞれの定義を述べておく。用いる辞書は新明解国語辞典（第七版）である。

満足感：自分の思い通りの状況になっていて、これ以上注文のつけようがないように思われること

誇らしさ：他人前で自慢できるようなことをして、嬉しさを感じる事

〈4〉では、承認欲求が促す読者の具体的な行動について調べる。

〈5〉承認欲求が選書にもたらす影響について調べる。

以下は調査結果である。

IV. 調査結果の分析

〈1〉 デモグラフィック情報について

ここでは承認欲求の有無について調べる。

① 年齢・性別を教えてください。

（調査対象は職場や学校など、人前で読書する機会のある方のみを対象）

合計 352 名の回答（内訳は、10 代が 82 名、20 代が 164 名、30 代が 70 名、40 代が 31 名、50 代が 5 名）が得られた。

② 読んでいる本を他人に見られたいか？

（以下の一連の質問項目に回答する際、ある一冊の本を回答者に自由に想定してもらう）

合計 352 名のうち、152 名が「見られたい」、200 名が「見られたくない」と回答。

本稿では、自身の読んでいる本を見られたいという承認欲求を分析対象とし、その欲求が読者の行動に与える影響を調査するものとする。

以下の図 1 - 1 は、読んでいる本を他人に「見られたい」、「見られたくない」それぞれの回答者の割合を示したものである。そして、図 1 - 2 は各年齢層の回答の分布を示したものである。

図 1 - 1 読んでいる本を見られることに対する意識の割合

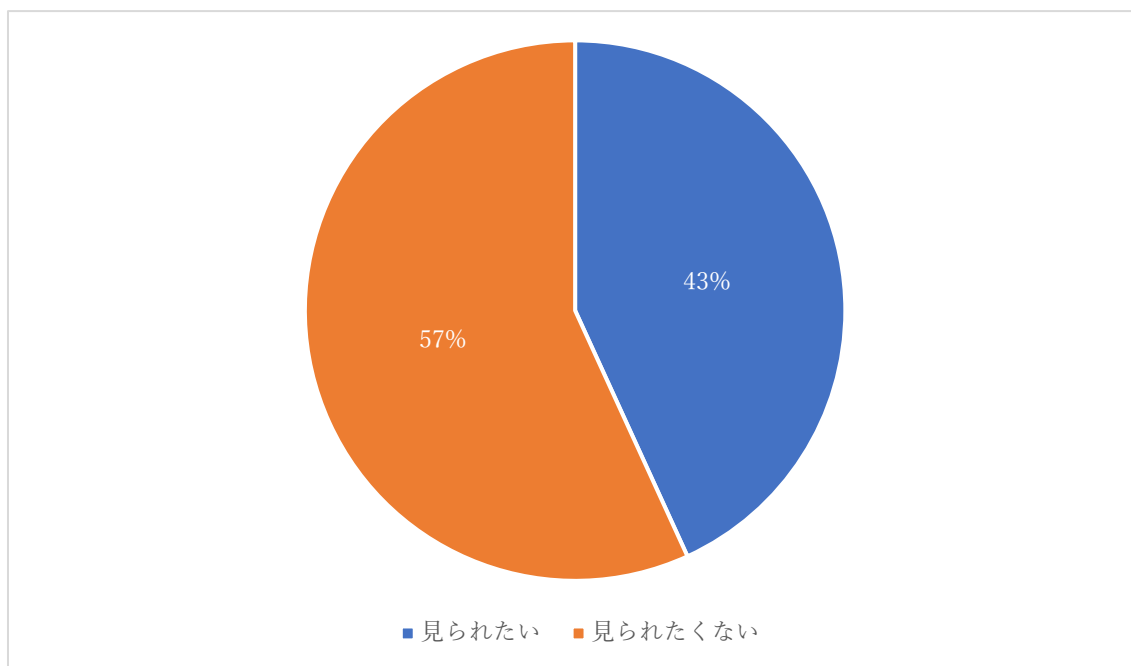
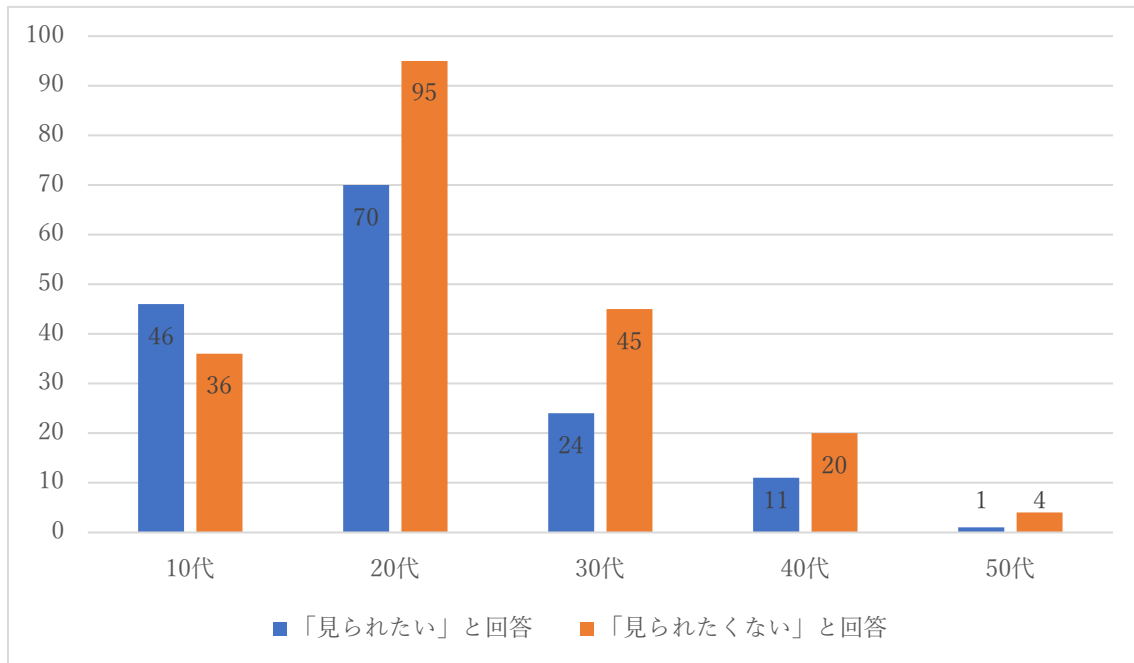


図 1 - 2 各年齢層における、読んでいる本を見られることに対する意識の分布
（単位：人）



10代のみ、「見られたい」と回答した人の割合が全体の過半数を超え、その他はどの年代も「見られたくない」という回答がより多く見られる結果となった。

〈2〉承認欲求の度合いとその要因について

ここでは、承認欲求があると回答したグループの承認欲求の度合いと、彼らが期待している自己呈示のイメージについて調べる。

① 自己主張の場として、他人に読んでいる本を見られるとどれくらい喜びを感じるか？

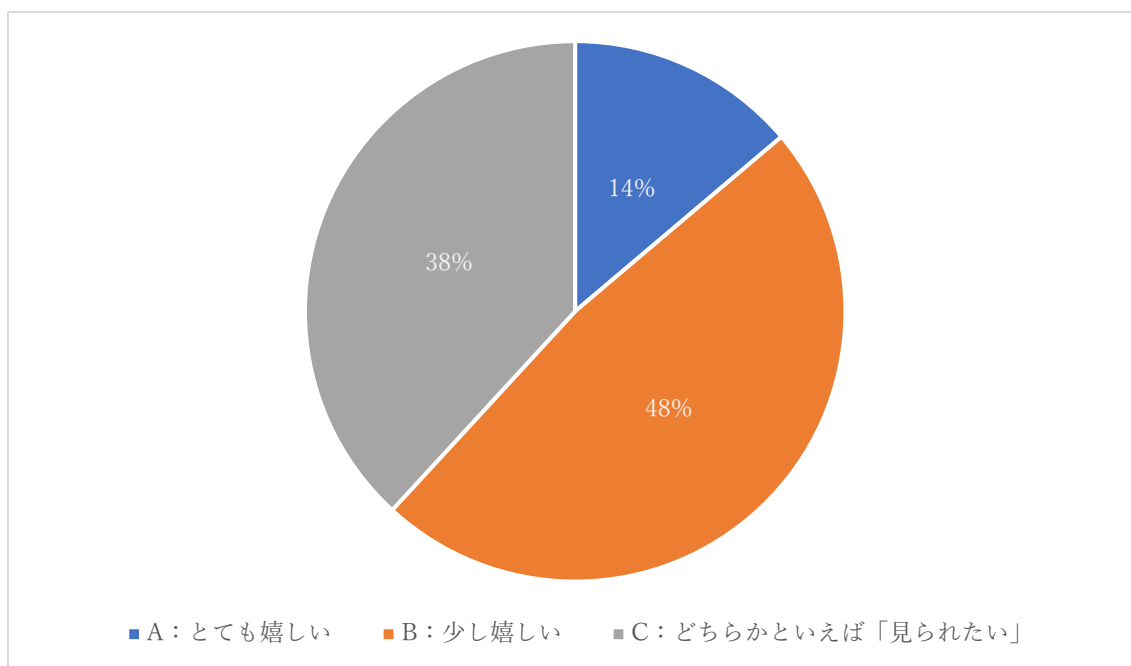
A：少し嬉しい

B：とても嬉しい

C：ほとんど喜びを感じないが「見られたい」か「見られたくないか」で聞かれたら前者に該当した

以下の図2-1はその回答率を示したものである。

図2-1 「見られたい」グループが感じる喜びの度合い



それぞれの回答者数は A が 21 人、B が 73 人、C が 58 人となった。A から C の順で、徐々に承認欲求の度合いは弱まっていくものとする。

また、年代別の傾向として、10 代のうち 78%以上が A あるいは B と回答したのに対し、20 代は 52%と大きく減少、それ以上の世代の数値も 50%前後という結果が得られた。図 1-2 で示した結果と照らし合わせると、10 代は他人から見られることに対して感じる喜びが強く、承認欲求の度合いが他の世代と比べて強いのではないかと考えられる。

② なぜ、他人に読書している姿を見せたいと感じるのか？

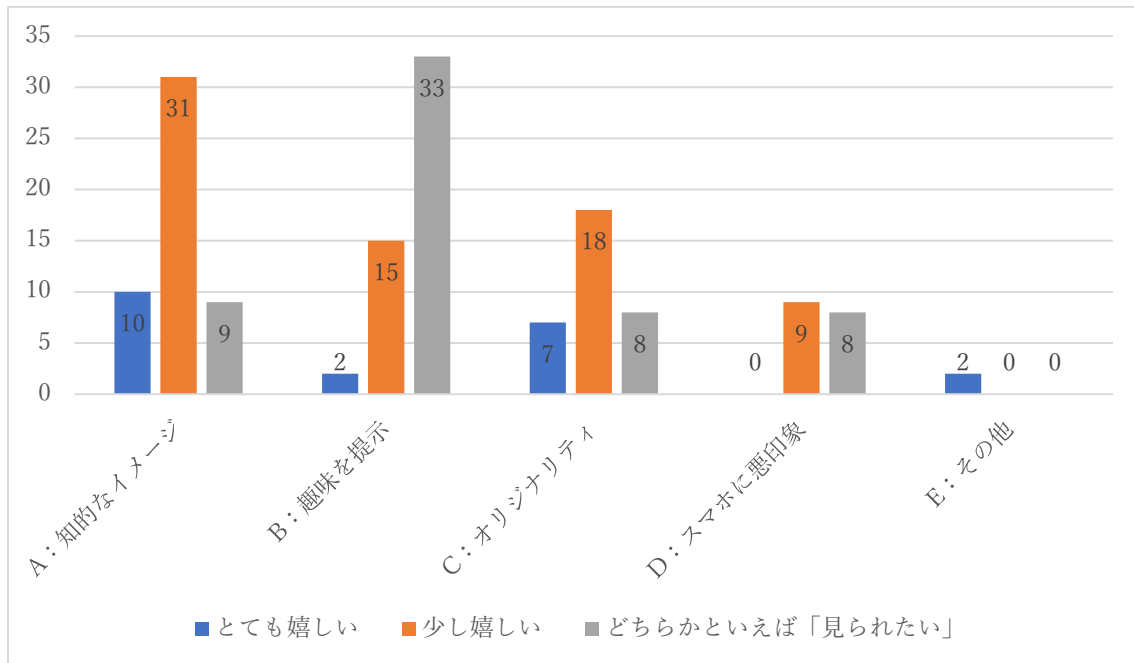
- A：知的なイメージを持たれることに期待しているから
- B：自身の趣味を周囲に提示できるから
- C：他人と違う行動をとることで、オリジナリティを表現できるから
- D：スマホで時間を潰していると思われたくないから
- E：その他（自由記述）

この質問の回答項目は、事前に本を読んでいる姿を見られたいと考える大学生 10 人にその理由を調査し、そこで挙げられた要素をもとに抽出した。

以下、図 2-2 はその結果である。

図 2-2 承認欲求を感じる理由

(単位：人)



「とても嬉しい」と回答した、承認欲求の度合いが強い人たちは知的なイメージやオリジナリティを期待しているという回答が占める割合が大きい。一方で、「どちらかといえば見られたい」と回答した、承認欲求の度合いが弱い人たちは趣味の呈示という回答が半数を超えた。

Aの「知的なイメージを持たれることに期待しているから」を選んだ人の75%以上は30代以上であった。一方で、10代はその割合が10%以下という結果が得られた。

Bの「自身の趣味を周囲に提示できるから」を選んだ承認欲求の度合いが弱い人の過半数により詳細な理由を記述式で求めた結果、その理由は主にひとつに絞られた。その本について話かけてもらいたいからという理由である。同じ本を読んだことがある、あるいはこれから読もうと思っている他人が、自分に話しかけてくれることを期待しているという内容だった。つまり、自己呈示の結果、新たなコミュニケーションが生まれることへの期待が回答理由として挙げられていた。

Cの「他人と違う行動をとることで、オリジナリティを表現できるから」を選んだ人の6割以上は10代が占める結果となった。他の選択肢と比べて、10代の回答はCに集中している。回答理由としては、周囲（主に学校）で読書をしている人が少なく、その希少性から目立つことができるという理由が多く挙げられた。

Dの「スマホで時間を潰していると思われたくないから」と回答した人の8割以上が30代以上であった。この割合はAのそれと共通している。30代の回答者における、これら2つの要素は相関係数0.60271409を示し、強い正の相関が見られた。一方、他の全ての世代では相関係数0.5を下回る結果となった。これらのことから、30代は他の世代よりも読書という行為に知的なイメージを抱き、スマホで時間を潰すことに対してマイナスイメージ

を抱いているという傾向がわかる。また、Eの「その他」と回答した2名は、空き時間にスマホを触っている人を見て、勉強や作業ができる時間を浪費していると感じ、自分は周囲からそう思われたくないからと記述していた。つまり、Dにおける悪印象の要因として「知的な活動ではないから」を挙げていることになる。このことから、AとDの繋がりが見られる。

ここで〈1〉を踏まえて、〈2〉の結果を整理する。10代は他の世代と比べて、読書している姿を見られることに強く喜びを感じる傾向が見られる。また、それぞれの世代が他人に読書を通してどのように思われたいか、そのイメージにも差異が見られた。10代はオリジナリティの確立に期待しているという回答が多く見られた。さらに、30代は知的な活動を行なっている・時間を浪費していると思われたくないという回答した割合が多かった。30代は、承認欲求の中でも否定的な認知を受けたくないという拒否回避欲求を含む選択肢を選ぶ傾向が他の世代よりも強く見られた。また、その他の世代は回答にばらつきがあるため、期待するイメージとその世代との強い関係は見られなかった。

〈3〉承認欲求を構成する感情について

ここでは、承認欲求を構成する感情について調べる。第3章で定義した満足感・誇らしさの2つの感情の度合いが、〈2〉で調査した周囲に呈示したいイメージによって変化するか調べる。

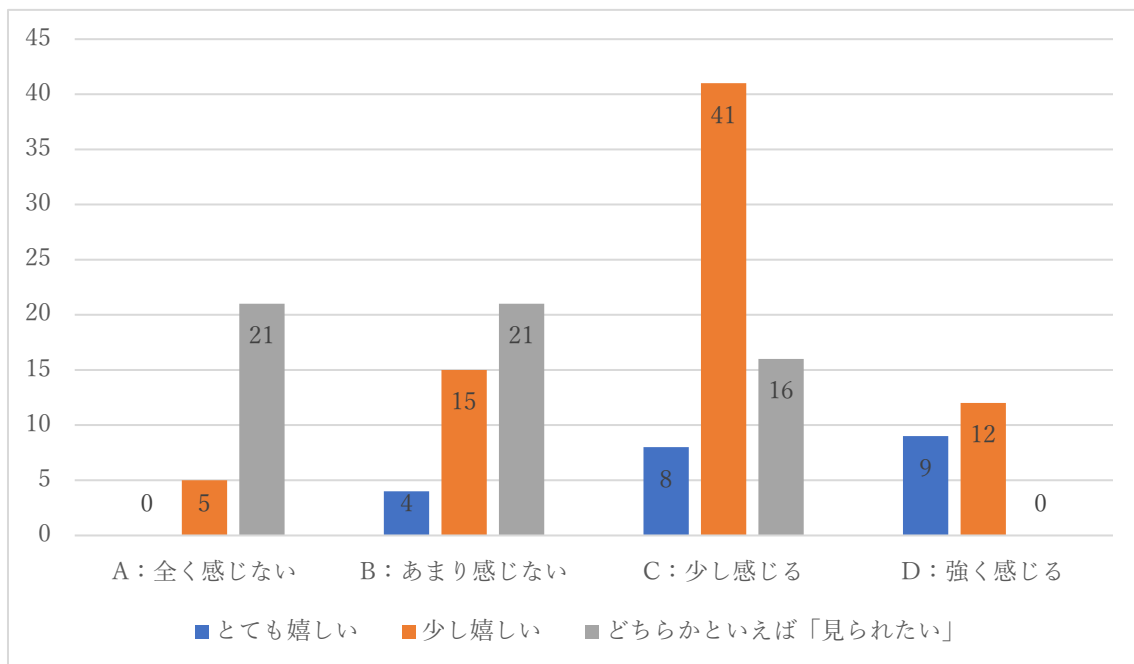
① 読書している姿を他人に見せることで、どれくらい満足感を感じるか？

- A：全く感じない
- B：あまり感じない
- C：少し感じる
- D：強く感じる

以下の図3-1はその結果である。

図3-1 他人に読書している姿を見せることで感じる満足感の度合い

(単位：人)



満足度の度合いが増すとともに、「とても嬉しい」と回答した人の占める割合が徐々に増加しているのがわかる。また、このグループで満足感を全く感じないと答えた人がいないのも特徴的である。一方で、承認欲求の度合いが比較的弱い「どちらかといえば見られたい」と回答した人の割合は満足度の度合いと反比例の結果を示した。こちらのグループも、満足感を強く感じると答えた人がいないという結果になった。

〈2〉の②で自身の趣味を周囲に提示できるからと回答した、喜びの度合いが「少し嬉しい」人たちの80%以上が、この質問でDを選択していた。これらのことから、自身の趣味を周囲に提示したいと考える人は、他人前で読書をすることに満足感を強く感じる傾向が見られる。

② 他人に読書している姿を見せることで、どれくらい誇らしさを感じるか？

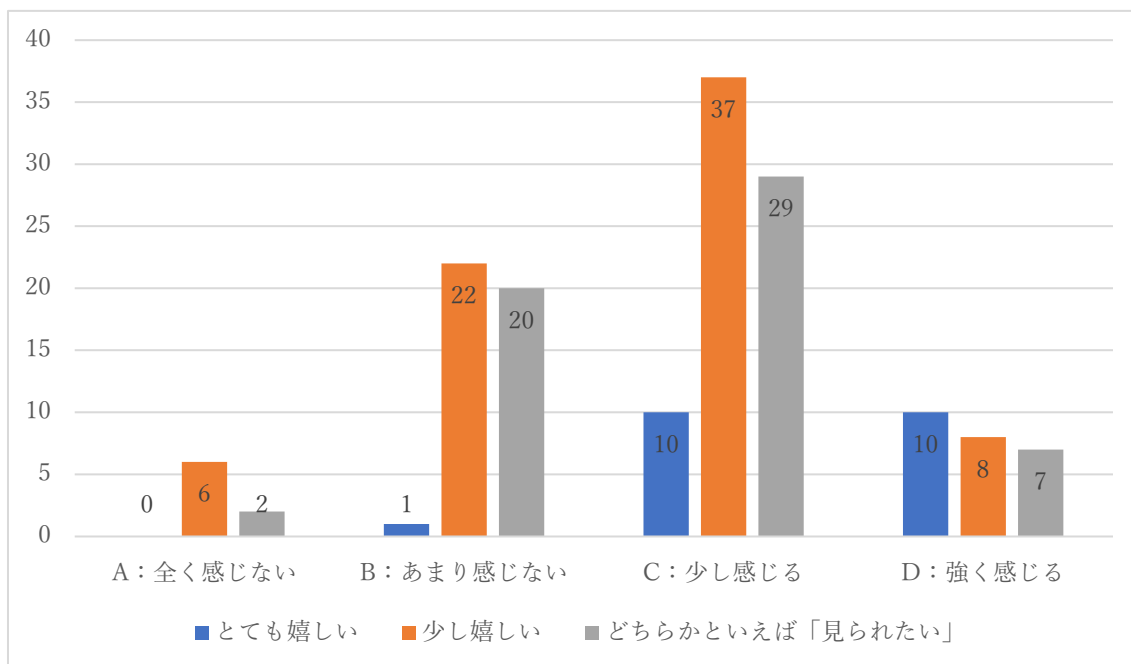
- A: 全く感じない
- B: あまり感じない
- C: 少し感じる
- D: 強く感じる

以下の図3-2はその結果である。

満足度の度合いとは異なり、全てのグループの過半数がCあるいはDと回答している。一方で、満足度の度合いと同じく、「とても嬉しい」と回答した人の割合は誇らしさの度合いと正比例に増加している。

図3-2 他人に読書している姿を見せることで感じる誇らしさの度合い

（単位：人）



〈2〉の②で知的なイメージを持たれることに期待しているから、あるいはスマホに悪印象があるからと回答した人の8割以上はこの質問でCあるいはDと回答していた。また、他人と違う行動をとることで、オリジナリティを表現できるからと回答した人も誇らしさの度合いがやや高い傾向が見られた。これらのことから、周囲に読書している姿を見せることで、知的なイメージを持たれることに期待している人・オリジナリティの表現に期待している人の承認欲求を構成する感情として、誇らしさが含まれることがわかる。

ここで〈3〉の結果を整理する。承認欲求を構成する感情として、満足感と誇らしさについて調査した結果、読書している姿を見せることで周囲に呈示したいイメージによって、感じる感情に差異が見られた。自身の趣味の呈示を目的としている人は、誇らしさに比べて満足感を感じる傾向が強く見られた。一方で、知的なイメージ・時間を有効活用しているイメージの呈示を目的としている人は、誇らしさをより強く感じる傾向が見られた。

〈4〉承認欲求が促す読者の具体的な行動について

ここでは、読んでいる本を見せるために選択する行動が承認欲求の影響を受けているのか調べる。

① 周囲に読んでいる本を見せるために、どのような行動をとっているのか？

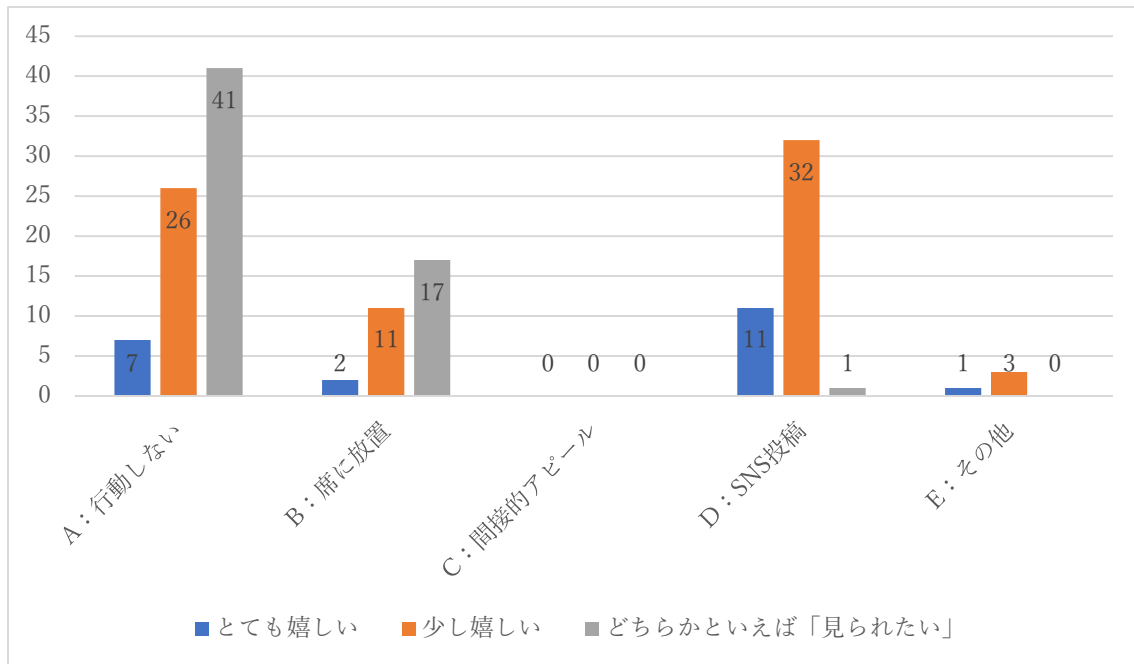
- A：表紙を他人に見られたらいいなと思いながら、特別な行動は取らず、読み続ける
- B：席を離れる時、わざと机に本の表紙が見えるように放置する
- C：読みながら他からの注目を促す間接的なアピールをする（咳払いや独り言・メモなど）
- D：読んでいる（読み終えた）本を SNS に投稿する

E：その他（実際に行っている具体的な行動を記述）

以下の図4-1はその結果である。

図4-1 感じる喜びの度合いと具体的な行動の分布

(単位：人)



承認欲求の度合いが高い「とても嬉しい」「少し嬉しい」と答えた人たちはどちらも、DのSNS投稿と回答した割合が最多となった。また、Cの間接的アピールはどのグループでも回答者が0人で共通していた。

また、それぞれの回答理由を記述式で募ったのでその結果をまとめる。

Aと答えた人の主な回答理由は、読書をする事自体が周囲へのアピールになっているからという一点に絞られた。そもそも想定した場所（職場、学校やカフェなど）で自分以外に本を読む人が多くないため、読書という行為自体が周囲へのアピールになっているという意見が多く見られた。

Bと答えた人の回答理由は、周囲にその意図を知られずに効果が期待できるからという一点に絞られた。周囲に読んでいる本を見られたいが、その意図を悟られることが恥ずかしいという意見が多く見られた。

Dと答えた人の回答理由は、SNSを経由すれば、その情報を受け取った人の反応を直接見ることがなく、恥ずかしさをあまり感じないからという点、一度の投稿で同時に複数人を対象にアピールできるからという点の2点に絞られた。前者はBと同じく、恥ずかしさを考慮する傾向が見られた。

Eと答えた人に具体的な行動を記述してもらった結果、4人ともが他人に自分の読んでい

る本について話すと答えた。期待していたイメージ（知的な印象など）を相手が抱いていると会話中に確認できた場合、承認欲求が満たされるという意見が見られた。また、四人とも過去に同様の体験をしたことがあり、それを再現したいと考えているという共通点が見られた。

以上の結果から、承認欲求の度合いが高まると、読書している姿を他人に見せるために積極的な行動をとる傾向が見られた。また、選択する行動に伴って、恥ずかしさを考慮することも示されていた。

ここで〈4〉の結果を整理する。承認欲求が本を周囲に見せるための行動に与える影響を調べた結果、欲求の度合いが高まるほど、具体的な行動を起こす傾向が若干ではあるが見られた。欲求の度合いが低いグループでは何も行動に起こさないという回答が全体の6割以上を占め、その理由として現代における読書という行為自体の希少性が挙げられていた。また、見られたいという賞賛獲得欲求を満たすための行動選択について調査したが、その意図を他人に悟られることで恥をかきたくないという拒否回避欲求もその選択基準に含まれていることがわかった。つまりどちらか一方ではなく、2つの欲求ともが行動選択の基準として含まれていることがわかる。

〈5〉承認欲求が選書にもたらす影響について

ここでは、承認欲求が選書にもたらす影響を調査するため、他人前で読む本を選ぶ際に、より考慮する本の要素について質問した。

① 他人前で読む本を選ぶ際に、より考慮する要素はありますか？

以下の図5-1はその結果である。

読書している姿を見られたいと回答した152名のうち、132名が選択基準の変化がある、20名が選択基準の変化はないと答えた。後者の85%は承認欲求の度合いが比較的弱い「どちらかといえば見られたい」グループであり、残りの15%はその次に度合いが弱い「少し嬉しい」と回答したグループであった。

② ①で「ある」と答えた方へ、その要素はどのようなものですか（記述式）？

回答結果は大きく以下の2つに分類された。

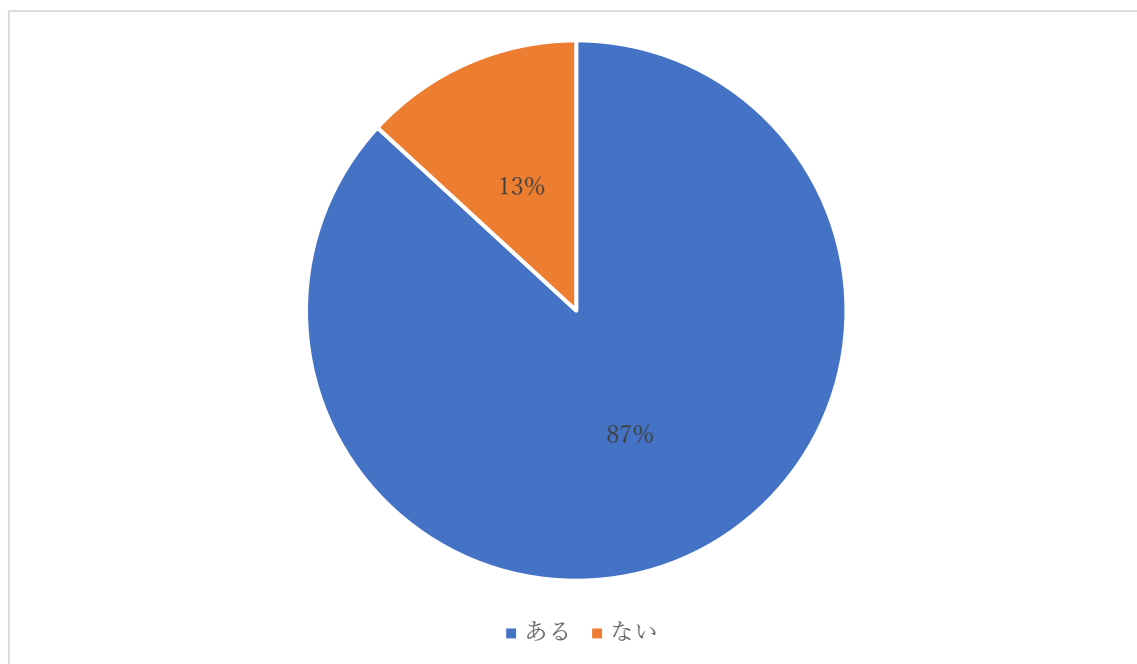
1つ目は、その本に対する世間的な認知度である。認知度・話題性・流行などが挙げられ、このグループは全体の90%以上を占めていた。この要素を考慮する目的は、周囲が自分に抱くイメージの制御にある。回答にあった例を基に説明する。例えばYouTubeで賢い著名人が紹介していた『バカの直し方』（タイトルは仮）という本を購入したとする。彼はこの本を他人前で読むことにより、知的なイメージを持たれることに期待している。しかし、実践してみると結果は、彼は自分をバカだと思っているらしくかわいそうだ、などの印象を持たれてしまった。その原因は、彼が購入した際に重視した紹介する人の情報を、見かける他

人が知らないことにある。つまり、見せたい相手はその本に対してどのような印象を持っているのか見誤り、その結果、理想とするイメージが実現できなかったのである。この事例からわかるように、本の認知度が読む当人と見せたい相手とで乖離が激しい場合、承認欲求が満たされない可能性が高くなる。なので、周囲が自分に抱くイメージをより制御するために、ある程度世間的な認知度がある本を選ぶ傾向にある。

2つ目は、その本が持つインパクトである。表紙の派手さ、装丁の奇抜さ、本の分厚さなどが挙げられ、このグループは全体の約8%を占めていた。この要素を考慮する目的は、より多く周囲からの視線を集めることにある。1つ目の要素と比べて、見せたい相手がどのようにその本を認知しているかの考慮は見られなかった。

ここで〈5〉の結果を整理する。読書している姿を見せたいと考える人を対象に、他人前で読む本を選ぶ際の基準の変化を調べた結果、約87%が変化ありと答えた。変化した要因の9割以上は、自身がどう見られたいかという印象を操作する上で重要なものであった。このことから、承認欲求は読者の行動に影響を与えているといえる。

図5-1 承認欲求に伴う、選択基準の変化の有無



V. 考察と課題点

(1) 分析結果の考察

本稿では承認欲求が選書にもたらす影響を調査した。

はじめに、読書している姿を周囲に見せたいと考える人の承認欲求の度合いと、その構成要因についての考察を行う。他人前で読書する機会のある人を対象に承認欲求の有無を調査した結果、4割以上が読んでいる本を見せたいと回答した。その中でも10代は他の世代と比べて欲求が強いという結果が得られた。読書している姿を通して周囲に呈示したいイメージとして、10代は自身のオリジナリティの確立が挙げられていた。その要因として、現代において読書という行為自体に彼らが希少性を感じているというものが見られた。また、世代間における呈示したいイメージの差異として、30代は知的なイメージ・時間を有効活用できる能力のアピールを目的としたものが過半数を占めていた。これらの結果から、読書という行為自体に対する大衆的なイメージに世代間のずれがあり、それによって、承認欲求として求めるイメージも世代間の差異があるのではないかと考える。これに加えて、承認欲求を構成する感情について調査を行った。先行研究と事前調査から抽出された満足感・誇らしさについて調査した結果、上記した「オリジナリティの確立」を期待するグループでは、満足感を強く感じる傾向が見られた。一方で、「知的なイメージ・時間を有効活用できる能力」を表現したいグループでは、誇らしさを強く感じる傾向が見られた。これらの結果から、承認欲求の度合いや呈示したいイメージは、当人が読書という行為自体に対して持つ印象の影響を受けているのではないかと考えられる。

次に、承認欲求が読者の行動にもたらす影響についての考察を行う。ここでは大きく2つの行動に分けて調査を行った。読書している姿を周囲へアピールするための行動、周囲に見られることを想定して本を選ぶという行動の2つである。まずは、前者についてまとめる。周囲に本を見せたいという第一の欲求（賞賛獲得欲求）の他に、その欲求自体を悟られることで恥を感じたくないという第二の欲求（拒否回避欲求）も、行動の選択基準として採用されていることがわかった。それを踏まえて、第一の欲求の度合いが強いほど、自発的な行動が増え、その度合いが弱くなるほど、第二の欲求をより考慮した選択（具体的な行動なし）が増えるという結果になった。次に、選書についてまとめる。ここでは、他人前で読むことを想定した場合、選書における判断基準は変化しているのかについて調べた。承認欲求があると答えたうちの8割以上が基準の変化を認めた。このことから、承認欲求は選書に影響を与えているのではないかと考えられる。また、変化した基準はどのようなものか調べた結果、その本の認知度や話題性などをより考慮する傾向が見られた。その本に対する印象が読んでいる当人と、それを見かける他人とで異なった場合、呈示したいイメージが正しく受け取られない可能性があることがその要因として挙げられていた。これらの結果から、承認欲求は読者の行動に影響をもたらしていると考えられる。

(2) 今後の課題

この調査を終え、承認欲求が読者の行動に与える影響はある程度確認されたが、明らかに

できなかった課題がある。それは、それぞれの回答者が読書に対して抱いている印象を把握できなかった点である。読書している姿を見せることで与えたい印象は、その人自身が読書という行為自体に対して抱く印象に大きく影響を受けると考えられるからだ。本稿では、承認欲求の構成要因のひとつとして呈示したいイメージを採用したが、そのイメージを深掘りすることはしなかった。なので、世代間での期待するイメージの違いやその傾向を分析することはできたが、その要因については明らかにすることができなかった。仮にこの要因が明らかになれば、承認欲求が選書にもたらす影響をより体系的に分析できるものと考えられる。

参考文献

株式会社丸善ジュンク堂書店 (2019)、「読書環境に関するアンケート調査」、『PRTIMES』、<https://prtmes.jp/main/html/rd/p/000000012.000027516.html> (2023年1月29日閲覧)

小島弥生・太田恵子・菅原健介 (2003)、「賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み」、『性格心理学研究』第11巻 第2号、日本パーソナリティ心理学会、pp.86-98。

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjpspp/11/2/11_KJ00002442204/_pdf/-char/ja

菅原健介 (1986)、「賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求－公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について－」、『心理学研究』第57巻 第3号、公益社団法人 日本心理学会、pp.134-140。

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjpsy1926/57/3/57_3_134/_pdf/-char/ja

注

¹ 株式会社丸善ジュンク堂書店 (2019)、「読書環境に関するアンケート調査」より抜粋。<https://prtmes.jp/main/html/rd/p/000000012.000027516.html> (2023年1月29日閲覧)。

² 菅原健介 (1986)、「賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求－公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について－」、pp.139-140。

³ 小島弥生・太田恵子・菅原健介 (2003)「賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み」、pp.93-95。